

市島謙吉氏談話速記

特別
↑4
1919
767



市
島
謙
吉
談
話
速
記

特
14
1919
64
767

市島謙吉談話速記

第一回

昭和十三年六月二十一日

於市島謙吉邸

速記者 小島 勇

○市島 私共の大學時代は、今の帝大の前身を東京大學と言つた。元は法學と理學の二科があつて、其外に醫科と云ふのが一科あつた。私共の前期の井上哲次郎君の時代に、初めて政治、經濟、文科が開けて、私共は其開けてから二回目の學生である。丁度明治十二年あたりから十五年位にまで及ぶのが私共の大學時代で、明治十二年から十四五年にかけての頃が最も政治の喧しかつた時で、國會開設運動期とでも言ふべき時代であり、又それに關係して言論彈壓の厳しかつた時である。殊に初めて官立學校で政治科と云ふものが開けた譯でもあり、私等は



最初から政治に興味を持つたと云ふやうな譯で、其時分に流行ものの新聞記者にでもならうと云ふのが志望であつた。時勢が時勢であつた爲に、學業の外に毎日何をするかと云へば、有ゆる新聞を讀んでは喜んでゐたものである。新聞に現はれた色々の事を見ては、若い青年期の血を湧かしてゐた。

話は前後するが開拓使官有物拂下と云ふやうなことが起り、引續いて大隈さんの挂冠が起り、大隈さんに懸念な者は皆袖を連ねて退いて來た。さういふ政治上に於ける大事件が連續して起つたので、學問上の事とは別な譯ではあるが、理科などにゐる人も、法律とか政治とか云ふ方面に頭を向けて來て、何とかして世の中に出て活動して見たいと云ふ希望を起した者も多かつた。實際に於ける言論社會はどんなものかと言ふと、當時政治家らしい民間の相當の人物は皆新聞を持つてゐる。小分けをして見ると、矢野文雄君を初め福澤諭吉、尾崎君、大

養君、箕浦勝人君等は報知新聞に據つて居り、沼間守一、島田三郎と云ふやうな連中は、京濱毎日新聞に據つて居り、成島柳北、末廣重恭と云ふやうな人々は朝野新聞に據つてゐた。私共は當時學生の身分で何處にどう云ふ先輩が據つてゐるかは、別に問題ではなく、唯若氣で政治家が好きだつたと云ふに過ぎなかつた。

今一つ言つて置きたいのは、私共の學生時代は、學生の潮流に二通りの區別があつたと言へる。地方別にして見ると、妙に關西から來た連中は、役人になりたいと云ふ希望に充ちてゐた。又後の行動に見ましてもそれ等の人々は、役人になつて可なり成功した者が多い。それに對立して、役人などを餘り偉い者と感心せず、學者にならう、役人なんぞになるものかと意張りくさつてゐた一派があつた。理科あたりにある者は、將來世の中に出て役人にならうと云ふやうな功名心がある譯ではない。東北、北陸等から來た連中はそれで、私も其方の組

ですが理科の田中館愛橋、藤澤利喜太郎と云つたやうな學者連も其の仲間、今言つた關西組と對立してゐた。大學時代の此潮流が、何となく後の経路を豫言したとも言へる。其對立と云ふものが妙なものになつて、役人になりたいと望んだ人々は多く帝政黨に行つたり、又自然の關係で、當時官權新聞と言はれた東京日々新聞に關係した。

當時の言論集會と云ふものは、實に窮屈であつて、今日から見ると實に馬鹿臭い程であつた。或は今頃の新聞記者等に向つて、僕等の時代はこんなものであつたと言つても殆ど信じないであらう。それは新聞條例の定むる所に依るのであり、又屢々それは改正せられ、改正せらるゝ度毎に嚴密になるのであつて、また段々變遷もあるのであります。が、何しろ頻々と起るのが發行停止、是は營業の權を妨げるのである。若し一枚の紙に不穩な事柄があつて、其一枚の紙を罪し、それを停止するとか禁止するとかと云ふのであれば尤もであるが、一の罪す

べき事柄があると云ふと一週間も二週間も、甚しきに至つては三十日も停刊を命ずるのである。そんな風で實に戦々競々筆のとりやうがない。朝憲を紊亂すると云つたやうな大袈裟な事柄なら筆を慎むことに異論はないが、詰らぬことに引つ掛るのである。又厄介なことは、裁判所の問題に付ては豫審に關することは一切載せてはならぬのである。この節でも豫審に關する深いことは禁ぜられてゐて、誰も新聞に書くやうな者もないが、少しばかり觸れても直ぐやられる。建白書を書いてはいけないと斯う云ふ。ところが妙な例もあるので。地方などに行きますと、或る縣會で、何か縣會の名義で建議をすると云ふことがあつた。ところが其地方の新聞でそれを書いた。そこで其地方の新聞は訴へられて、その建議を載せてはならぬと云ふ條文に該當すると云ふのでやられた。實に苛察なものでありました。一番前には讒謗律と云ふものがあつて、讒謗することを特に取締る爲に一つ獨立した法律

が出たが、後には讒謗する者に對しては、刑法に依つて處分されることになつた。能く官吏侮辱事件と云ふものが起つたが、官吏侮辱とはどんな事柄かと云ふに、今日に於ては皆許されてゐる事柄である。今日では内閣大臣を指して、あの人は少し愚鈍だと言つたところで、別に咎められはしないが、其當時は内閣大臣どころではない、巡査を彼れ是れ言つても罪になつた。何と言つても一番民衆に手近い小役人が巡査であるので、それから生ずる罪が一番多かつた。大分縣で起つた被疑事件で可笑しいのは「巡査さんとは知らずに惚れた、お前は巡査かわしや源左、わしとお前は廻りにや食へん」。標本として私はこれを擧げるが、こんなことでも罪になつたのである。營業上困つたのは發行停止である。考へて見るとこれ程不届なことはない。昔は罪が三族に及んだことがあるがそれと少しも變りはない。一枚の紙に罪があるからと云つて、未だ生れない紙にまで罪を及ぼすのは言語道斷である。實に當時は戦々競々たる有様でした。

其當時大學時代私共に兄分として尊敬をする人が生れた。それはまだ大學に在學中のことであるが、私の或る友人——それは大學に關係のない友人ですが、其人の紹介で、小野梓君と云ふ人に紹介された。當時の同窓で、今は名前を忘れた者もあるが、約十人位、それは高田や先頃死んだ天野、岡山兼吉、山田一郎、山田喜之助、砂川雄峻それから私、斯う云ふ面々が紹介されて小野梓君に會つたと云ふことが、抑々大隈さんに接近する動機を生じたのであります。小野梓君と云ふ人は土佐の人で、昌平費で漢學をやつて、それから外國に行つて外國で法律、政治を研究した頗る人格の高い人で、何れかと言へば政治家肌と云ふより學者肌の人である。殊に帝國大學——當時の東京大學に在學する者や、卒業して間もない者も非常に喜んで遇して呉れるので吾々は非常に尊敬した。當時大隈さんは參議で例の雉子橋に邸宅を持

つて居られ、小野さんが斯う云ふ人々があるから、是非お遇ひになつて下さいと言つて大隈さんに勧め、吾々も間もなく小野さんに連れられて大隈参議にお目にかゝつた譯であつた。其時分の學生なんかは、今とは違つて制服はなし、羽織を持つてゐる者も一人もなかつた。ぼろぼろの袴で、足袋も穿かずに行つた。大隈さんの家は、一時非常に喧しく且つ贅澤な家だと云ふ評判であつた。事實はそれ程ではなかつたが、壁が西洋造りで、牀にはニスが塗つてあり、餘りきらきらして吾々は轉倒しやしないかと危ふんだ位である。斯う云ふ譯で大隈さんに會つたが、大學生が十人も一團となつて大隈さんの麾下に馳せたと云ふことは珍しいことである。今早稲田大學と云ふ教育上の大機關があるが、あの前身である東京専門學校と云ふものは、恐らく、吾々十人ばかりの大學を卒業せんとする者があると云ふことが、根柢で、あの學校が抑々造られたものであらうと思ふ。言ふ迄もないが學校など

と云ふものは金があるからと云つて、直ぐ造れるものではない。何とんでも先づ人がなければならぬ。人の用意は既にある。其時には理工科はなかつたが、法科も經濟も政治もある。各科とも人物が備はつてゐると云ふので、抑々東京専門學校と云ふものが計畫されたものであらうと私は想像する。若し吾々が小野君に依つて、大隈さんの麾下に馳せ参じたところの效能がありとすれば、これが一番大きな效能であつたと思ふ。それは兎に角後のことでありますが小野さんに交際ふやうになつてから、暫く小野さんの家に通つた。小野さんの住居は遠い所で、向島の向ひ側の橋場であつた。其家は小野さんの義兄の家で義兄と云ふのは小野義眞氏、これは當時非常に榮えてゐた三菱會社、即ち岩崎の所謂内閣員の一人であつた。其處に一週間に一遍位は出かけて行つたが、何しろ郊外でもあり、官憲が尾行して來ると云ふ厄介な時節であつて、十人が皆揃つて行く譯には行かない。それで三々五々

非いゝ加減に散歩でもしてゐるやうな風を装ふて、こそこそ出かけたものである。併し私だけは色々の便宜上、橋場の近間に自分の家を移してゐた。他の者は遠くから通つてゐたが、一生涯を通じてあれ程興味を感じたことはなかつた。と云ふのは、政治のことは學校で色々教はつたり、本を讀んだりしたが、政治の活機に觸れたことはなかつた。小野さんは現に役人で政治の渦中にある人である。それで其人と交際してゐる内に、初めて活きた政治と云ふものは、斯様なものかなと感得したものである。平素は兒戯に類するやうな演説の稽古もした。小野さんを聴き手にして、勝手に各々が立上つて演説をしたこともある。まア其間に色々なこともあるが、開拓使官有物拂下事件と云ふものが起つた。これは朝野に非常な議論のあつた問題である。あの時分の院長は誰であつたか憶えないが、小野さんは當時會計検査院の一等検査官であつた。検査官の一等高級の人ですが、これは内閣直屬機關で、

小野さんは非常に嚴格な男であつたから、時折内閣大臣を顔色なからしめたものである。其一例を申しますと、検査官と云ふものは、各省の財産を取調べたり、關係銀行に各省の領金を調べに行く。其調べに當つては、前の習慣では、何月何日に何役所のものを調べに行くかと云ふ豫告をして行つたものであるが、小野さんは左様なことはしない。豫告なしに出し抜けに行つて調べて、それで間違がなければいゝのだと云ふ解釋をする人であつた。或る時豫告せずに出かけて行つて各省のものを全部一時に調べたところが、どうも揃つてゐない。先生大に憤慨して、これを閣議の最中にぶちまけた。お蔭で銀行に關係のある大臣の面目は、まる潰れになつたと云ふやうなこともあつた。そんな嚴格な人であつた。然るに開拓使官有物拂下事件と云ふものが起つた。三百萬圓もするものを三十萬圓で拂下げ、而も無利子で長い年賦武であるなどと云ふ、殆ど官有物を只で呉れてやるやうな問題が起つ

た。官有物をそんな風に處分するに付ては、會計検査院は最も責任ある地位なので、小野さん等は眞面目になつて憤然と憤つたものである。今その時に小野さんが書いたものも残つてゐるが官有物拂下を非とするの議と云ふ建議を書いたことがある。そんな話を局に當つてゐる人から直接に聽かされてゐるから、一層吾々の感じもえらいもので、斯うした事件を後から考へて見ると、是等は國會開設と云ふものを促進するに拍車をかけたものと思はれます。そこで大隈さんなどは無論そんなことから、何とかして早く開かなければいかぬ。若し斯様なことが繰返されては堪らぬと考へられたに違いない。丁度其折に御巡幸に供奉して出かけられたのであるが、もう其時の事材料は、既に揃つてゐるであらうと思はれますが、御巡幸先で大隈さんにどんなことがあつたかは、私共は其時分は少しも知らなかつた。後で知つたこととありますが、まだ早稻田の學校も起らない時で、大隈さんと云ふ人は

福澤さんに始終遇つてゐて、政治上の相談と云ふものは、大抵は福澤さんとやつたものである。豫め議會と云ふものは、早く開けなければならぬと云ふことに付て、福澤さんとは打合せがあり、内閣員の伊藤井上と云ふやうな長州派の者とは、打合せがあつた。そこで御巡幸先でどう云ふことがあつたか、或は天子から御下問になつたか、それとも大隈さんから進んで申上げたか、それは分りませぬが、何しろ世間では暮々たる議論のある問題ではあり、國會開設を促進する運動は旺んであつた。御巡幸のお供をした人の中に有栖川の宮様が居られた。私共の聞くとおりに依りますと、有栖川の宮様から大隈さんに、どう云ふ議會を作つて、どう之を始末すべきかを問はれた。其時に大隈さんから出して御覽に入れた覺書と云ふものは、今でも残つてゐるが名付けて密奏と言はれる。大隈さんが他の内閣大臣を差措いて、内々で奏上したと云ふ風に悪しざまに言はれてゐるが、そんなものではない。

當時奏上の覺書の文章と云ふものは、どつちかと言へば、後の憲法政治の組織其他の要略を書いたもので、矢野君の筆に成つたものであると云ふことは、渡邊君が、矢野さんに訊ねたとき「それは明に自分が書いた。あの時は陸宣公の奏議と云ふ支那の名文を読んで、其調子でやつて見た」と云ふ話があつたが、私共は其事が如何にも豫想外に大變なことであつたと云ふことは、後になつて福澤先生の塾中の秘密文書となつてゐるものを借りて読んで見て驚いたのである。それは福澤先生の門下に、伊東茂右衛門と云ふ人があつて、其人が福澤さんの命を帯びて大隈さんの出先に使に行つた。大隈さんはもう直ぐ歸京すると云ふ時である。福澤さんが伊東茂右衛門を呼んで「君には濟まないが君はまだ妻子もないことであるから、君の命を俺に呉れ」と言つた。突然の話で驚いたが「あなたの仰しやることなら、命を上げてもいいが、どうしたことですか」と言ふと「大隈さんのやつたことが薩派の

非常に憤慨する所となつて、大隈來らば只は措かぬと云ふ見幕である。俺の所にももう逮捕に來さうだ。逮捕されることは覺悟の上だ」と言つてゐたと云ふのである。昔は牢屋に入ることは、官意に殺されると云ふことであつた。「殺されることも已むを得ない。既に覺悟はしてゐる。ところで君も戻つて來ても注意しなければならぬぞ」と云ふ話である。「それは結構です。私は明朝大隈さんが戻つて來ると云ふから挨拶に行きませう」「挨拶に行けば、お前途中で殺されるぞ」と云ふやうな話があつたと云ふことが、伊東茂右衛門の手に依つて書かれてゐた。これで如何にも其時のことが急であつたことが分る。伊東茂右衛門は大隈さんが戻つて來たと云ふので、翌朝挨拶に行つて見ると、大隈さんは支度をして出かけるところであつた。そこで立話をしたが大隈さんは有栖川さんに面會出來ず、宮中に參内と云ふことになる。是れ又參内を許されない。言語道斷の譯合で、遂に前には一緒にやら

うと言つてゐた伊藤なども其時にやつて来て、遂に大隈さんが冠を挂けることになつたのが明治十四年である。どうして薩摩の奴がそんなことをしたかと云ふと、これも伊東茂右衛門の書いたものに依つて私共は知るのであるが、九鬼隆一と云ふ人、これは福澤先生の門下の人であるが、これが薩派の歡心を得んが爲に、福澤先生と云ふ自分の師匠が大隈さんの後指についてゐることであるのに、大隈の企てを悪しざまに言つたので、薩派は憤然として、大隈を殺してしまへといふことになつたが、困つたのは有栖川の宮である。有栖川の宮は決然言はれた。「大隈の何處が悪い、大隈が悪ければ俺も悪いのだ、俺はちやんと大隈に色々の意見を聞いたが、俺は皆大隈の説に賛成だ、大隈が悪ければ俺も悪いのだからどうにでもしろ」斯う言はれて、大隈さんに手を下す譯に行かなかつたと云ふことである。そんなことは當時鷗渡會の連中の耳に聞えたことでも何でも無いが、後から調べて分つ

たことである。十四年の政變と云ふものは、實に大變な政變であつたのである。その後大隈さんの困られたことは非常なもので、糧道を斷たれたのです。何處の銀行でも大隈さんに金を貸さないので大隈さんは實際弱つて、鍋島家に助けられたこともある。この本（新聞集成明治編年史）に依ると妙なことがある。或は事實かと思ふが、愈々挂冠と云ふことになつて、糧道を斷たれてしまふので、鍋島家では大隈さんの功勞を賞して、自分の藩からは色々の人が出たけれどもどうも終りまで能くやつたものはない。唯あなただけである。それに今斯う云ふ境遇に立たれては氣の毒であるから、毎月五百圓宛自分の家から金を出すから、受けて呉れと云ふことを鍋島家から申込んだ、それに對して大隈さんは斷然斷はつたと云ふことが何かの新聞に出てゐたと云ふことが、これに載つてゐる。私共もこれまでそんなことは聞いたことはないが、或はそんなことがあつたのかも知れませぬ。兎に角金融

を鍋島家で圖つたことがある。それを聞いて政府ではそれまで止めようと考へたけれども、鍋島家ではそれに頼^着眉しなかつたと云ふことは大隈さんも言つてゐた。

そこで大隈さんが野に下つてから、政黨運動が始まるのであるが、これより先自由黨の方は、もう既に随分激烈な運動をやつたもので、まア青年輩のいゝ加減な連中が喜んで投じたものだ。それ等はルソーの民約論なども疎に讀んでゐない。唯自由自由と云つて、單純に自由の解釋をしてゐる連中、謂はば自由の解釋すら分らぬと云ふのが自由黨の建前である。「板垣死すとも自由は死せず」と云ふ名文句は、一時非常な評判を博したものだ。自由と云ふものを達する爲には、手段を選ばないと云ふ亂暴なやり方で、實例として最も明な事件は、大阪自由黨の疑獄事件で、見様では國事犯とも見られようが、丁度其時分に朝鮮に事變が起つた。此事變に乗じて自由黨の面々が、内外の

攪亂を圖つて、其機に乗じて一舉に政府を顛覆しようとしたことであつたらしい。それで其爲には軍用金が要る軍用金が要るから大事の前の小事と云ふ譯であつたでせう。現に目安は窃盜と云ふ名義を受けてゐる。中々の重大事件で、其時に勾留された面々の名前を見ますと、當時聞えてゐた自由黨の者は、皆網羅されてゐる。大井憲太郎と云ふ者が、首謀になつてゐるが是は随分亂暴な人であつた。私なども一寸知つてゐるが、亂暴者であつた。それから土佐、福岡、關東、さまざまあるが皆自由黨であつた。河野廣中の事件、又私の郷里の高田事件斯う云ふものが色々あつて、政黨の氣運と云ふものは、大に勃興したやうなものであります。けれども一面から言ふと、其やり口が亂暴急激である爲に、ひどく人心を失つたやうに思ふ。随分それに加はつて色々な行動をやつた連中の中には、相當資産を持つてゐた者もあつたが、皆それを蕩盡してしまつてゐる。自由黨に入る者は皆資産を喪く

する、いや自由黨だけではない。黨派に關係すれば産を失ふと云ふので、人は成たけ黨派に近付かないやうな氣運を醸成したことは無理もない。國會は段々近付いて來ると云ふのに、國會の準備としての政黨がこんな風であり、又それを協議する集會とか新聞と云ふものが、非常な壓迫を受けたのが實際であつたと云ふのは、どうもおかしなことである。そこで大隈さんが改進黨を組織することになつたのは、どう云ふ動機かと云ふことは問ふまでもない。どうも自由黨のやり口では政黨は成立たない。あんなものは寧ろ國の害を爲すものである。眞正なる政黨を造らなければならぬと云ふのが、大隈さん等の主張で、そこで改進黨と云ふものが生れることになつた。それは自由黨の亂暴に對立する爲のものであつたに違ひない。さうして大隈さんの帷幄の衝に當つた者は矢野君、小野君其他であつた。私達は唯小野君に依つてのみ知ることが出來ただけである。或る時政黨をどうしても、造らな

ければならぬと小野君が言ふ。「どう云ふことですか」と問ふと、あの人は第一餘程ものの分つた人でありまして、一体法律と云つたやうなもの、我國にもちやんとある。何事も其在來の法律に依つて運ばなければならぬ建前のものである。憲法と云ふものは日本にはないけれども、併ながら日本の國体から割出して見ると、自ら其處に何も無い譯ではない。必ず國体に副はなければならぬ。國利民福を圖ると言つたところで、圖るに自ら方法がある。其方法を用ひずして、所謂橋掛がなくして直ちに或る場所に達せんとするのは無理であり、有害である。例へば自由と言つたところで、其自由に達するには道がある。自由に達するにはどうしても、穩健な手段を選ばなければいかん。どうしても一直線に達せんとするのは無理である。斯う小野さん自らは考へてゐた。老練の人と云ふものはさう考へるのが當然である。私共の大學ではフェノロサが來て政治學を受持つてゐた。其時分の教科

書と云ふものは、どうも能く覚えておませんが、ウルゼーと云ふ儘か英吉利人かと思ふが、其人の政治學と云ふものを教科書に用ひてゐた。それにあつたかどうかは、私は能く覚えませんが、又今持つてゐないから調べる譯には行きませんが、フェノロサが其教科書に付て色々自分の説を入れて筆記させてゐた。其筆記に依ると、今のやうなことがある。フェノロサは非常に穩健な論であつて、直接行動と云ふやうなことはない。自由であらうと、幸福であらうとそれを得るには必ず相當の手段がある。其手段を以てしなければならぬが、其手段たるや、必ず穩健でなければならぬと云ふのである。改進黨と云ふのは一寸柔か味を帯びてゐるが、秩序ある進歩でなければならぬ。フェノロサの講義もさう云ふやうな説で、其筆記が二十行位もありましたらうか、其筆記を持つて行つて、直ぐ小野さんに見せたのです。すると小野さんは非常に氣に入つて、此通りだと禮讀され、そこで私共が一

生懸命に改進黨の宣言を書いた。あの人はそんなことには、非常に丁寧熱心であるの宣言は何遍書變へたか分らぬ。恐らく十數回書變へたと思ふ。それで初に書いたものは、まるで換骨脱胎して變つたものになつた。初はフェノロサの臭があつたが、後には全然其香氣がなくなつたのである。さう云ふ主義の人であるから、自由黨のしたことの裏を行くやうなことが多い。第一には皇室の尊榮と云ふものを眞先に持つて來てありますが、あれなど餘計なことのやうでもあり又當然のことのやうでもありますが、實はあの時分には大事なことであつたのです。實はあの時分の議論と云ふものは紛々たるもので、國會開設を急ぐと云ふのでありますから、隨て生ずるのは憲法ですが、如何なる新憲法を作るかに付ては議論が多く、佛蘭西流の憲法に倣ふことは日本の國體とは非常に離反するけれども、そんな議論が多かつた。皇室なんかはあの時分のことです。實は殊々尊敬しなかつたのです。其一例

を申しますと、後藤新平は醫者であつて、其時分に名古屋病院の院長をしてゐた。丁度其頃に隣縣の岐阜縣で、板垣さんが難に遭つたと云ふので頼まれて馳せ付けたのです。そこで勅使が來られると云ふのです。板垣さんが遭難したのに、岐阜縣廳はまるで構はないで、いゝ氣味だと言はんばかりの体であるのです。あれ程のことがあつたのに見舞にも行かない。然るに勅使が來ると云ふ電報が來たので驚いたと云ふのです。ところで板垣さんの周圍にゐる内藤魯一と云ふ人などは、大抵其時分の考も分ることですが、そんな勅使などは御免蒙らうではないかと言つた。それを板垣さんは、側で聞いてゐて非常に叱つたのです。そこに勅使がやつて來て、板垣さんは感泣したと云ふことです。君臣の關係と云ふものはさうある筈のものであつて、維新の功臣が難に遭つた。それに勅使が來ると云ふのは當然であるが、地元の縣の役人が知らぬ顔をしてゐたと云ふのは、全く失態である。それで縣廳の役人

が慌て、後れ馳せに見舞に馳せつけたら、板垣さんは怒つてそれを退けたと云ふことを、私は後藤さんから直接聞いてゐる。ところで後藤さんは名古屋病院に歸ると、間もなく今度は愛知縣知事から息子が悪いから一寸診て貰ひたいと言つて來た。後藤さんは飛んだことをしたと思つた。と云ふのは隣縣に往診に行くには自分の縣知事の認可を得てからでなければならぬのだ。然るに自分は認可を受けずに岐阜縣に馳せつけたから、必ず免職を喰ふに違ひないと思つて、愛知縣知事の許に行つて見ると、さうではなくて、具に岐阜縣の状態を聞かれ、岐阜との振分を問はれて、自分の心配したほどのことはなかつたと云ふのです。どうも斯うしたことを考へて見ますと、皇室の尊嚴と云ふものは餘り考へられてゐなかつたやうで、實に危いものであつたと言はざるを得ない、一体當時の識者間に於ても、憲法思想と云ふものは甚だ薄いものであつて、長い間新聞の上で主權論が闢はされたものであ

る。今考へて見ると大したこともないが、ソヴアレニティーと云ふものは、どんなものかと云ふことは、西洋の書物で見て、ははア、ソヴアレニティーとは、こんなものかと云ふ位で、實ははつきりしてゐない。大体ルソ一の書物などには、閉口したもので餘り調べた者はない。渡邊安積などが日日新聞で暫く其問題を擔當したことがあるが、大學生を煩さなければならぬ程度にまで論戦は激しくなつた。吾々も黙つてはゐられないと云ふやうな譯で、高田君、山田一郎君などと五六人で、主權論をそれぞれの部分に分けて擔當したことがあるが、私共の書いた主權論と云ふものを日本の國体に當嵌める譯で、随分危い問題であり、日本の主權は何處に在るべきやと云ふことからして、随分危険な問題である。丸善の好意で傍木哲次郎編輯、主權論と云ふものの出版されたことがあるが、誠に幼稚な話で、憲法に付ても随分色々な人が考へて、種々書かれたものであるが、何と云つても大成したものは小野君の國憲汎論でせう。これは其衝に當つた金子さんも言つてゐる。伊藤さんが欽定憲法を草案するとき、あれを大分使つたと云ふことです。あれは幸に完成したから結構でしたが、御承知の通り三冊に分つてほつぽつ出されたが、あの人は身體が悪い爲に萬事を廢するやうになつたが、あれだけは能く調べて穩健の結論をつけてある。伊藤さんは欽定憲法を作る爲に特に外國に出掛けたと云ふ事實もあるが、吾々が後から考へて見ると、色々の缺點とか不滿等が多少ないでもないが、兎に角あれだけの憲法を暮々たる紛論の間に、外國に行つて調べたとは言へ、能く作り上げられたと感心する。中々あの頃の氣風としては、佛蘭西風のデモクラチック一點張のものでなければ、承知しないと云ふ空氣もあり、又或る方面では寧ろ保守的のものにしたといふ意向もあり、實を言へば、欽定憲法は如何なるものが出來て果してそれが直ぐ取上げられて、直ぐ通るかどうかと云ふことは、吾

吾内々心配したものであつた。日本の國體を能く考へた立派な穩健なものが出来てゐると言はざるを得ない。これは渡邊君の誓いたもので何時か見たかと思ふが、伊藤さん達も、西洋にまで調べに行つたけれども、どうすれば良いか洵に困つた。其困つてゐるのに洵に仕合せてあつたことは、シュタインやグナイストなどに出會つて、それ等の説を聞くと、如何にも穩健であつて日本の國體によく當嵌る。それで愁眉を開いたと云ふことを内閣の同僚に、向ふから手紙を寄越したと云ふことであるが、全くそんなものであつたらうと思ふ。随分其衝に當つた者は難儀をしたことと思ふ。あの時分の考からすると、人のしたことは何でもケチをつけると云ふ時であつたから、よくもあれが無事通つたと思ふ。或は欽定と云ふ所で、一つ抑へをつけたものであるかも知れないが、兎に角其憲法で帝國議會と云ふものは明治二十三年に開くことが出来たのである。

姑く考へて見ると、明治十四年に大隈さんが挂冠の時は、十六年には國會を開くのだと云ふことを主張した。事實は其後八年を経た明治二十三年に開けたのであるが、此八年間と云ふものは、サンザンなものであつた。大隈さんの言ふが如く、十六年に開き得たかどうか、僅か三年間で準備が出来たかどうかは、疑問であります。併しこれをずつと延ばしたことの爲に、起らないでもない、紛擾が、随分澤山起つたと云ふことも事實である。中にはとても國會など開けるものでないと云ふので、赤坂の假御所の前で自殺した者もある。此當時のことと云ふものは、實に慘憺たるもので、議會は明治二十三年に開けたのであるが、どうも私共遺憾に思ふのは、一体内閣中で憲法のことを能く知つてゐる者、兎も角立憲政治の思想のあると思はれる人は伊藤さんである。然るに其伊藤さんと云ふ人は、狡い人であつたのか、二十三年の舞臺には現はれないで、山縣さんが現はれて來た。山縣さんはど

つちかと云ふとどうも立憲的の人とは思はれない。どうも立憲と云ふことを理解してゐないと思はれる山縣さんが一番先に現はれて、第一回の議會はどうか解散はせずに済んだが、最初から難かしい問題が起つて、第二回の議會に現はれたのは、松方公である。松方公も餘り立憲的の人物ではない。隨て非常に亂暴を解散をやつた。憲政史に於て類のないやうな亂暴を政府自らやつたのである。

第一回の議會はどちらかと云ふと非常に立派な人物が議會に來たと言へる。各地とも候補者を選ぶに非常に眞面目であつて、立派な人物が出て、自分の國で適當の候補者のない所は、他の國又は東京までも人物を探しに來た程で、第一流の人物が集まつた。平素政治に付て苦勞した人物は、大抵は第一回の議會には集まつたので、實に立派な議員が揃つたのである。これ等の人物を慰撫して何とかして後の後まで議會に置くことが出來たら今の議會はどんなに立派であつたかと思ふ

が、政府はそれを嫌ふ。松方内閣の如きは、何でも彼でも敵方の大物は叩き落さなければならぬと云ふので、選挙の大干渉をやつて、遂に殆ど全部を叩き落した。それ等を考へると功罪は果して政府に在るか政黨に在るのか、直ちには斷じ兼ねるのであつて、必しも政黨のみに罪があるとは言へない。政府の方に罪があると言つても差支ない。第三回議會に至つて漸く伊藤公が、樞密院議長から首相として乗出して來た。そんな譯で、第一回議會だけは兎に角解散を免れたが、随分酷ひ解散が行はれたものだ。今少し政府の人に雅量があつたならばと思ふのでありますが、何しろ喧嘩の相手だと云ふ風に、政府の方では考へたらしい。それも無理もないと云へば言へないこともないやうなもので、蓋長が作つた天地だと云ふやうな考で、非常に驕つた氣持がある。何だ今頃出て來あがつて吾々の功を彼れ此れ言ふのは、洒落臭いと云ふ考があつて、政黨なり民間の政客と云ふものは、中々承知し

ない。そんな所からどちらかと云ふと、民論壓迫と云ふことが、政治上の不祥事件を激成したとも言へる。此點になると餘程よく調べなければ功罪何れに在りやは容易に断じ兼ねると思ふ。今の政府の人々はまるで前行を忘れたかの如くに政黨のことばかり悪口を言つてゐるがそんなものではない。何しろ折角造つた改進黨と云ふものも政府の方では決して自分の味方であると思つた譯ではない。例の政社法と云ふものがあつて、非常な壓迫を加へた。黨員たる者は悉く届出なければならぬと云ふ厄介なことがある。各支部を作つて、連絡を取ることが出来ぬ、外の政治団体と呼應して、聯合することが出来ぬ。そんな譯で手も足も出ない。そこで大隈さん達も名簿等は廢めたらどうだと云ふことを主張されたこともあるが、矢張り當時の事情に於ては、一旦は名簿を拵へて、矢張り固まらなければならぬと云ふことがあつたと見えて名簿は廢止されなかつた。そこで政府の壓力が勝を占め、自由

黨も解黨した。即ち政社法が喧しい爲に、政黨と云ふものは皆解黨せざるを得ないことになつた。改進黨は解黨しなかつたが大隈さんは脱黨し微弱なものとなつた。

こんな形勢であつたので改進黨方面では、社交俱樂部見たいなものを作つた。名前は明治協會と云ふのであるが、會長は前島密で、最初は四百名ばかりであつた。改進黨の名簿に載つてゐた者が主であつたが、黨派と云ふものに恐怖を感じて入黨することは嫌だが、唯心を寄せてゐるだけならと云ふ連中も網羅して、明治協會と云ふものが出來たが、實は餘りえらく發達しないうでしまつた。其後壬午協會と云つてこれも一寸社交俱樂部のやうなものであるが、明治協會よりもつと規模の小さいもので、報知社の連中、毎日社の連中、朝野新聞の連中、小野梓君の鷗渡會の連中、それ等が大隈邸に寄つて、大隈さんも加はつて雜談をするのであつたが、二三度會つて特別政論に觸れないこと

もあつた。唯何となく大隈さんの御馳走を頂戴することが多かつた。そんな譯で、明治協會も、壬午協會も大したことはなかつた。それに似たやうなことで「内外政黨事情」と云ふものを發行したことがある。何しろ報知社連中は報知新聞を持つて居り、毎日連は毎日新聞を持つてゐる。皆それぞれ新聞を持つてゐるのに、小野さんの組は何も機關紙がない。何とかこれを作りたいたと云ふので始めたのであるが、政治の衝に當つたのは、私と山田一郎である。兎も角小さなものでも何とかしてやらうと云ふことになつたが、例の服部誠一と云ふ「東京新繁昌記」を書いた人ですが、京橋の外れに丸屋と云ふ紙屋があり、其二階で、九春社の編輯所があつて東京新誌と云ふものを發行してゐた。さうして服部誠一君が毎日出張して来る。これに談じ込んで「内外政黨事情」と云ふものを隔日出すことにした。今の新聞を二つに折つたもので八頁と云ふ誠に小さなものだが、政黨のこと以外のことは、何

も書かなかつた。部数は幾らも出た譯ではないが、それでも三箇月位續いた。其時分には政黨と云ふことが、餘り實際によく分つて居なかつた。西洋あたりの政黨運動と云ふものも、まるで一般の人は知らない。そこでそれを書かうとしたのであるが、私の名義で出た「政黨論」は慥か其新聞に書いたものを纏めたものであつたと思ふ。こんなことは餘り種にもなるまいが……。

御提出箇條書の中に、改進黨員の個人に對する批評と云ふことがあるが、言へば色々のことがあるが一つ言ふべきことがある。それと云ふのは、改進黨の麾下に參じた者には、随分立派な人が多かつたが、大隈總理と對抗し得るやうな人物は河野敏鎌と云ふ人である。土佐の人で、元老院では相當聞えた人であつたが、一度内閣に入つたことがある。副總理格の人で、大隈さんを推戴した人であるが、一度は大隈さんと位置を争はんとしたことのある人ではないかと思ふ。それと云

ふのは、或る時鷗渡會に出て見ると、小野梓君が刀を側に寄せてゐる河野と云ふ人も、土佐人であるから小野さんとは同郷關係の人であるが「河野は怪しからん、若し彼に異志があるならこれが」と言つて刀を按じたことがあつた。事實は何もなくて済んだが……

○問 改進黨が出来てからですか

○市島 いや其以前です。準備中のときです。あの人は結局氣狂になつて死んだですが……

—— 花柳病とアル中でした…… 或はさうかも知れませぬ。随分過激な人で、どつちかと言ふと自由黨型の人物でした。

第 二 回

昭和十三年六月二十八日

於市島謙吉邸

速記者 西來路 秀 男

○市島 前會にははつきり言はなかつたのですが、鷗渡會などと云ふものは、實は唯大隈さんの帷幄に居つたに止まつて、ちつとも頭を出さなかつたのですね。まだ其時分卒業して居ませぬ。私は政治の方専門で、卒業しがけに學校を駈出してしまつたので、あとの連中は皆それから一年半ばかり居て、其時分にはまだ在學中であつた。色々な人が卒業期になつてから間諜ついて、三宅雪嶺だとか、坪内雄藏だとか、此頃亡くなつた石渡敏一などと云ふのは皆一年遅れたのです。兎に角在學中は政治運動を幾らかやるのですから、表立つたことは一つも出来ないので、演説をしようと言つたつて内方ではかりやつて居るので

表へ出て議政會や、嚶鳴社なんぞの連中と一緒にやるなどと云ふことは、絶対になかつたのです。又さう云ふ資格もなかつた。唯唯囂に居つて、そこに東京専門學校を經營することになつたものですから、皆其處へ來て投じてしまつた。さうして教育家に變じてしまつたのです。

それから壬午協會のことは、先達て一寸書付けを拜見したが、それで思出すのは、あれは明治協會と違つて、憲法其他の政治上の色々のことや、行政的のことや何やを靜に調査する、研究するなどと云ふことが目的で立つたかと思ふのです。隨て嚶鳴社も、議政會も、私共の陽渡會の連中も、其處へ寄つたのですが、是は手廣うに人などを募集して會議した譯でなくて、先づ大隈邸に寄つて、何か研究の結果を發表するとか相談するとか云ふ位のことであつたのです。どうも其會から餘り効果が生れたとも言へないので、小野君などは、そんなことに拘らずに「國憲汎論」を荐りに勉強して書いて行つたのですから、強

ち壬午協會が出来たからそんなことが、起つたとは言ひ得ないのです。私は今日は主に地方のことを少し申さうと思つて居ります。

其前に、質問項目の中に、壯士と云ふことがあるので、それを一寸簡單だから申して置きます。まあ一時の流行物と云ふ譯で、政界に壯士と名付けるものが一時起つて、是が或る場合には、中々政界を賑はした、と云ふか、場合に依つて一つの大事な機關とも言へるやうな働きをしたのであります。けれども是が中々厄介なもので、血氣の人間で、職業もなくブラブラして、唯生意氣に演説などをしたがつて居ると云ふやうな連中ですから、之を色々に御せば、色々な動きをすると云ふことは勿論のこと、是が全國に瀰漫したことは非常なもので、就中政争の激しい土佐とか、石川縣とか、佐賀とか云ふ方面に於ては是が最も跋扈したものであつて、随分危険な事が頻繁に起つたものであるが、偕て靜に考へて見るに、この壯士の起ると云ふことも、已む

を得ないので、其時の政府と云ふものが、一向大人氣なくて、何とかすると警察或は憲兵を以て壓すると云ふやうなことであるものですか、勢ひそれに對抗するには何かなければならぬと云ふことで、そこで一層壯士と云ふものを起させたと云ふやうな譯で、誰が起したかと言へば、政府も責任が無い譯ではないやうに感ずるのであります。其壯士と云ふものが、一番利用されて大切がられたのは、選挙の時であります。其時分の選挙と云ふものは、後にお話しますが、大變幼稚なものであつたので、どうしても何か其事専門に携はる人間でなければ、選挙と云ふものは殆ど行はれないやうなことであつた。そこで壯士と云ふものが自然に生れて来て、是が食糧を與へられ、日當を當へられて携はると云ふやうなことになつて、或る場合に於ては随分亂暴な手段を以て、脅迫的に投票などを誘ふと云ふやうな働きまでとつた譯であります。

是等のことは餘り詳しく申すまでもなく、大抵分つて居ることです。りますが、唯一つ申したいのは、三多摩の壯士と云ふものが一時盛んであつた。是は恐らく塊つて長く一種の働きをした標本であるかも知れない。其牛耳を執つたのは星亨である。星亨の平生言ふことには、幾萬の味方を持つて居ても、それが各地に散在して居るのであつては、一朝事有る時に呼んだつて急速に來り會するものではない、そんなものを對手にして戦をやるなどと云ふことは、兵法としては最も拙なるものだと言ふので、三多摩に壯士と云ふものを募集した、と云ふよりは寧ろ養成したのでありませう。是が中々働いたものなので、其働くに就ては自ら頭取らしい者がある。星亨が一時大いに悪玉のやうになつて、色々勝手なことをしたと云ふのも三多摩壯士の力に依ると謂つても宜いので、何か事があると三多摩の壯士が飛出した。之に付ては警察なんかも随分困つた位のことであつたやうであります。

今日になつて見ると壯士と云ふものは、其跡を絶つたやうであるが當時は此壯士輩の爲に怪我をする位な危険を受けたことは少くないのであります。唯壯士に非ずして稍々壯士に近いものと言へば、妙なことでありますけれども、例の保安條例に引掛つた者は、百人近くもあるのですが、尾崎君などは、其中の最も記憶されて居る一人である。相當な人があの範囲にある。是は壯士と云ふよりは、上級のものであるのですが、政府の眼から見たら、是もやはり壯士であると見たのかも知れない。渺くとも壯士を操縦する壯士の親方位のものであつたと見なければならぬやうな譯になると思ひます。

それで地方の事情と申す方に移つて少しお話しして見ようと思ひます。是は少し長いのです。私の政治上に付て實際の経験を經たと云ふことは、唯地方に於ける一つの事であるのであります。何にしても議會開設より六七年前から、自分の郷里の新潟縣に記者生活をやつて居つ

た譯であります。其當時の新聞記者をんと云ふものは、申すまでもありませんが、記者と云ふよりは、幾らか政治をやつたと云ふやうなところなのです。何時も何時も新聞社をあけてあちこち廻つて居ると云ふやうな譯で、隨て新聞の營業上からすると甚だ困つた人物が、即ち主筆だと云ふ次第であつた。私の記者時代と云ふものが、漸く帝國議會と云ふものの曙光が、凡そ見えると云ふやうな時代であつた。私の前任者としては、尾崎行雄君、箕浦勝人君、それから吉田熹六と云ふ人がありました。斯う云ふ人々と云ふものは、地方では相當政治の爲になつた人のやうでありますけれども、私の關係した新潟新聞の主筆となつた時代は洵におとなしい、實は政黨方面に付き、政治方面に付ては、此人々は格別なことを爲さずに東京へ戻つてしまつたと云ふことが實際なんです。其時分には、まだ本當の政機動かずと云ふ譯で、まあ其人々には格別仕事がなかつたと云ふやうなことで、唯筆を執つ

て居つたに過ぎなかつたのであります。私の時になつてから、始めて色々なことが起つて來たので、勢ひそれに携らなければならぬと云ふやうな事になつたのであります。

其時分の幼稚な有様を申しますと、何年頃でありましたか、是も國會の始まる四五年前かと思ひます。私に縣會議員になれと云ふ勸めで或る有力者が頻りに推薦して呉れたことがある。それは新潟市から擧げられる縣會議員である、私を推薦した人と云ふのは、新潟市では有名な人であります。是は殆ど全市知らぬ所がないと云ふ人であつて、非常に活動的な人で俺一人で以て、君を擧げて見せると云ふやうな意氣であつた。所が其投票を開けて見ると一票の差で私が負けになるのです。片方の對手は、名前の必要もないですが、是は辯護士であつた。そこで始めて新潟縣に吾々の方面に於て問題が起つたと言ひ得るのです。其投票と云ふものがいけない、嘘だと云ふ投票改めが始まつた。

所が證據が現れて來た。私の門下生に、新潟で今でも有力な富豪があるのです。其息子が私の門下生なんです。それが投票權を有つて居る。ちやんと實印まで押して投票して居るのにそれがないと云ふ。それから問題が起つて選挙やり直しと云ふ事になつたのであります。それは實に其當時の選挙などと云ふものは暢氣な譯のものでして、投票と云ふものを町の年番が、皆各戸に就て有權者から集めて來て、さうしてそれを開票すると云ふ譯である。之を監督するものも確にある譯ではない。年番の所に行けばどうにでもなるやうな譯ですから、其間に色々なことで變化を生ずると云ふやうなものであつたのでせう。其時分の選挙に對する銘々の考と云ふものは、今から見ると實に呆れたやうなものでありまして、まるで意に介さないどころではない。選挙など云ふものはうるさいもので、年番が、君書付けに書いて置いて呉れと云ふやうな譯です。隨てどんな改竄も出來たと云ふやうなことな

ので、一方にうんと悪い考を持つて働き掛ければ、どうにでもなると云ふやうなものであつたのであります。併ながら一方は辯護士であるし、一方は新聞記者と云ふ私であるやうなことでありますから、是は中々平和に改^收まらないので、兎に角其時分に選挙無効、選挙やり直しなどと云ふことは、恐らく日本中になかつたらうと思ふのであります。さう云ふことが一遍あつた。選挙と云ふことが、段々厳密になつて来たのはそれからずつと後のことであるので、其時分は縣會の選挙などと云ふものは、割合に大切な事であるのであるが、殆ど唯形式だけで以て皆迷惑がると云ふ位なことであつたと云ふ状況であるのです。

そんな譯でありまして、私が六年ばかり郷里に在つた間と云ふものは、自由黨の方は早く新潟^縣に成立つた。殊に頸城の方面に一番早く出来たと云ふやうな譯であります。隨て高田事件と云ふやうなものも起つたやうな淵源であります。其他方々に自由黨の根據たるべき所があ

つたのであります。自分の郷里の選挙區である新發田などと云ふ所にも、相當自由黨分子があつた譯です。所が一方にさう云ふものがあるのに、それに對抗するものは、唯僅に頸城の方面に、其對抗的のものが起つた位のものであります。あとは殆ど自由黨の爲すに任せてあると云ふ状態である。そこで其黨派と云ふものに對する一般の考と云ふものは、殊に財産でもある者の考と云ふものは、非常に黨派を恐れたと云ふよりは自由黨のやり口と云ふものを非常に恐れた、と云ふのは自由黨の方面の有力な者は、やはり皆相當資産のある者であつたのですけれども、それは皆財産を蕩盡してしまつて居るのです。それを眼前に見て居るものですから、何でもさう云ふ所に携はれば、やはり同じ運命になるものだ^と云ふやうなことで、ひどく恐れたものであるのです。警察などと云ふものは、其點は全く舊制を守らせて居つたと云つても宜いやうな譯で、別に警視廳邊りから、彼此れ訓令を出す

云ふやうなこともなかつたと思ひます。隨てやはり自由黨を忌むことが非常に甚しいので、私は兎に角改進黨の人間であると云ふことは、警視廳、警察には知れてゐるのですが、寧ろそれを保護して、成たけ自由黨を壓迫しようとする位な形勢であつたのであります。さう云ふ譯であつて、こつちが飛込んで、私は改進黨員である關係もありませんから、どうしても、自分の郷里に改進黨と云ふものをちやんと起さなければならぬと云ふことが、自分の一番重大な使命であつたのです。然るに今申すやうな譯で、資産のあるやうな有力な者は皆屏息して、成たけ黨派には携はらぬと云ふやうな譯である。これには私共は随分困つたのです。其時分縣會議長をして居りました山口權三郎と云ふ人も中々有力な中越方面の人で、是等も資産家であるものですから、ひどく黨派と云ふものを嫌ふ、黨派を嫌ふ關係から政治家も嫌ふ。そこで一心一向に殖産ばかりを熱心に主張する譯である。そこで殖産協

會と云ふものをこの人が起したのであります。私が其事に參畫して殖産協會の組織、その他あらゆる筆に乗ることは、自分が擔當すると云ふやうな譯で、是が起つたのですが、是が改進黨と云ふものの組織の上に於て、先驅をなすやうなものである。今申す山口と云ふ人が、殖産協會を起すと云ふ譯ですから、中越後方面の實力ある素封家と云ふものが、全部それに参加したのです。さうしてあちこち酒飲み半分に廻つて歩いて會合すると云ふことでありましたが、其中から起つたものが即ち内藤久寛を社長とした石油會社であります。そこで石油會社と云ふものが始めて起つたのです。殖産協會ですから、さう云ふことを實地に行ふと云ふことのそれが發現であります。此石油關係のことは詳しく申す必要もありませんが、其前から屢々越後を石油地と看做して、色々の人が手を着けて居る。大隈さんなども手を着けたことがある位です。であります、どうも皆さん成功しなかつた。其成功し

なかつたのは、何故であるかと云ふと、徹底的にやつて見なかつたと云ふことに歸するのであります。内藤久寛がさう云ふことを考へ出した時分には、人が皆よく思はなかつた。と云ふのは、石油事業などをやると云ふことは山師の仕事である、資産のある着實な人のやるべきことでないと言ふ風に、皆の人が考へて居る時であつた。所がそんなことを言つて居るべきでないと言ふので、流石に殖産熱心の連中ですから、其蒙を啓くと云ふやうなことで、内藤の會社と云ふものは出來た。それが即ち日本石油會社です。こゝでおかしいのは、どうも此事業をやり遂げることは中々容易でないから、縦しんば會社の株の配當などがあるにしても、何年の間それを受けまいと云ふ約束でした。そんなことはまだしも、其株主が途中で逃げては困ると云ふので、皆保證金を取つて、逃げない爲に土地などを押へて置くと云ふやうなことまでやつたのです。さう云ふことの爲に大抵なら廢めてしまふべき所

を踏留まつて或る程度まで掘つて見たと云ふのが、此日本石油會社の成功した所以でもあり、又それ程のことをやつたのは、あれが始まりなのです。

それは餘分な話ですが、さう云ふ殖産ばかりやつて居るので、私のやうな政治的に何か考へて居る人間は、どうも煩悶に堪へない。そんなことばかりやつたつて仕様がな。山口と云ふ人に、政治と云ふことを加味しないかと云ふが、何としても聽かない。それから政治を離れては殖産と云ふものが興るものではない。幾ら殖産を興した所で、政治が悪ければ一朝にして其殖産などと云ふものは、どうなるか分つたものではないと云ふ詰らぬ講釋までやつて、やつとこさと政治と云ふ意味を加へたと云ふ譯であります。それが本になつて、政治と云ふことが本體ではないが、どうしても政治を離れてはならぬものである。即ち政治上の考を相當に同じうすると云ふ者が、一致したものを造る

必要があると云ふので、それは二十三年のことを考へた上のことなの
ですが、茲に同好會と云ふものを企てるに至つたのです。是は主に各
郡の有力者を網羅した上、苟も自由黨系でないものは、悉く網羅した
のです。但し上越方面は別に一つの形式で自由黨に對する改進黨のや
うなものを既に組織してやつて居るのですから、それは全く除外して
中越後、下越後と云ふものを殆ど蕭卷したのです。それは随分努めた
ものでありまして、其名簿は今残つて居るのです。あの時分の各郡の
人を千人ばかり網羅した譯であるのです。是が改進黨系の黨派、何れ
かと言へば、自由黨に對する反對派である。但し是は政黨政社に非ず
して、俱樂部である。斯う云ふ建前であつたのです。そこへ自治制と
云ふものが發布された。是は國會に先立つ一つの地方議會制度みたや
うなものが發布されたと云ふ譯です。中々あの當時に於て自治制と云
ふものが、本當に分るなどと云ふものではなかつたのでありまして、

外國の自治などと云ふものを實際に見て居れば、色々に考へられもし
たやうでありますけれども、あの條例だけを見ては一寸分らぬもので
あつた。唯條例を講釋する位のことには、それは誰だつて出来るのであ
りますけれども、私なども有體に言ひますと分らなかつたのでありま
す。併し何としても何箇月かの後に、それを實施される譯であります。
そこで其實施すべき人間は、町や村に控へて居つて、政治なんぞ大嫌
ひの連中が事實町長になり、村長になり、議員になり、町や村の行政
を自ら執らねばならぬと云ふことになるのでありますから、政治は若
い者のすることだなどと言うて、安閑として居る譯に愈々いけなくな
つて來たのであつて、そこで各地に自治制の講釋と云ふことが始まつ
て來た譯であります。其講釋をする人に私が迎へられると云ふやうな
譯なのであります。餘り分らないのですけれども、一通り好い加減な
胡麻化しは付かぬ譯でもないから、其自治制の講釋で諸方を奔走した

と云ふ譯である。所が是が改進黨を形造ると云ふ上に於ても、非常な助けをした譯であります。何處の村なり町なりに行きましても、其處へ集つて來る連中と云ふものは青年輩ではないので、皆町村制、即ち自治制が實施される曉には、其行政を自ら執つて立たねばならぬと云ふやうな資格の人間が、其講演を聴きに來ると云ふ譯で、謂はゞ其町村の中樞たるべき者を會議すると云ふやうな譯であつたものですから其講釋を長くした譯でもありませんが、三回か五回位で終つてしまつたのでありますが、それで以て各町村と私の間に聯絡が生じたと云ふやうな譯であります。一遍粗末な私の講釋を聴くやうな連中も、何となく親しみを感じると云ふやうなことになつた。こゝに師弟の關係でもないのですけれども、一寸親密な關係が起つて來た。一時何でも、是は主に下越後でありましたが、七箇所乃至十箇所ばかりさう云ふ會が起きた。さうして次から次へずつと渡つて歩いて講演すると云ふや

うなものであつたので、其講演をすれば其範圍のものは皆自分の味方である。自分の黨派の人である。斯う云ふやうな傾を生じて來たのであります。そこで、自由黨が非常に氣を揉み出した。どうもあゝ云ふ風に段々蠶食されては困つたものであると云ふやうな話で、東京から態々相當そんなことの講釋の出來るやうな人間を引張つて來て、さうして同じことを競争的にあちこちでやつた。斯う云ふやうなことがあるのです。果して議會の選舉と云ふことになる分野と云ふものは殆どそれで定つたやうなもので、私の出席して親しみを結んだ所の者は皆吾々の方に味方すると云ふやうになつて、どうも餘りにあちこち澤山さう云ふ會があるので、迎も私は廻り切れないうで、行くことが出來なかつたものは、或ものは自由黨の方に就くと云ふやうなことになつたと云ふ一つの事があるのです。

まあそんなことで、段々改進黨と云ふものを用意すると云ふ譯です

けれども、改進黨などと言つても、やはり人が毛嫌ひするので、さう云ふことを言はずに、先刻申した同好會と云ふことで頼りにやつて居る。要するに結局其同好會と云ふものが、即ち改進黨はなつたのである。りますが、さうして段々盛立てて居る所へ例の大同團結と云ふものがやつて來た。あれは中央では改進黨も自由黨も、何だか氣勢が揚らぬで仕様がな。政府の壓迫に堪へない所からではあります。皆解黨してから後であるので、そこで上等の山師連が寄つて集つて、是は何でも彼でも、後藤を擔ぎ出して大同團結と云ふことで、自由黨も改進黨も皆一つの旗の下に入れて政府に對抗しよう、斯う云ふ案を立てたものがある。そこで、越後などは餘程大切な所と見たものと見えて、後藤自らが大石正巳を連れて新潟へやつて來たのです。そこで越後方面は、私が握つて居るやうな形なので、私の前任者である吉田熈六などと云ふ者が手紙を寄越し、其他私の同憲である友人などで、改進黨

に關係ある人間が手紙を寄せて、是は此時勢に於ては是非一遍大同團結を形造ることが必要だから、君も皆を率ゐて参加するやうにして呉れろと云ふ手紙を大石君が齎してやつて來たのであります。それで私も困つたのでありますけれども、さう云ふことは私としては絶対に出來ないので、やつと萌芽を現はしたやうな同志をさう云ふ大風呂敷に譯もなく包まれて引摺られては大變だと云ふ考へを持つて居たものですから、有力な同志の所へは、私は手紙で決してさう云ふ所へは參加してはいかぬと云ふやうなことを言つてやつた譯であります。そこへ恰度、新潟縣の大地主會と云ふものが、時々縣廳の勸誘で新潟で會をするのですが、是は中々有力者の會であるので、さう云ふ會が其折にあつた。そこで大同團結を希望する方の自由黨は、それを一網に掛けて皆大同團結の範圍に入れようと考へたものである。所が其面々は皆それを恐れて居る面々であるのをこつちは知つて居るものですから

後藤さんは維新の元勳だなどと言つて大袈裟なことでやつて來て居る。それをどうか今の儘で、第一大地主の會合などへ出席しないやうにしなければならぬ。其當時やはり土佐の人ですが、濱政弘と云ふ相當の人間が岩崎家の代表見たやうなもので、大地主と云ふ形で以て新潟に暫く居ました。是は土佐の人だから後藤とも懇意である。それで濱野が言ふのは、どうもうるさい奴が來た、是は下手を間違つくと大地主と云ふものが、皆元勳を迎へるなどと言つて騒がないとも限らないから、一つ斯う云ふことにしよう。濱野の策ですが、今日着いたばかりだから、今日は別に饗ばれることもなからうから、俺は自ら馬車に乗せて行つて何處かで一杯やつて、そこへ大地主を皆集める、そこでさつさと一回歓迎會を開いたと云ふ恰好にすれば、あとは御免蒙つたつて差支ないから、それは宜からうと云ふので、其通りしたのです。後藤は今日なら別に差支ないと云ふことで、あの淡泊な人ですから、

濱野の言ふ通りに行形と云ふ新潟の料理屋へ出掛けて、そこへ三四十人の大地主が寄つた譯です。そこで後藤先何を談ずるかと云ふと、是は又大隈さんと違つて唯豪傑肌の人で、殊にさう云ふ人間を收攬するやうな藝術を持つて居る人ではないので、僅に頭にあるのは佛蘭西の革命史と云ふやうなもので、佛蘭西の革命を談ずるのですから、是が第一の縮尻、革命と云ふことを最も恐れて居るので、是は自由黨よりも更に恐れて居る。其佛蘭西の革命史を好い加減に語り出した。さうして中には實業家、銀行家が澤山居るのですからよせば宜いのに財政論を始めた。後藤さんの財政論なんと云ふものは、それは聞けた譯ではない、それで呆れた上に更に呆れてしまつて、財政論なんと云ふものは全くものになつて居らぬ。唯さう云ふ連中を集めて一夕の會をしたのは後藤さんと云ふ人が呆れらるゝ爲に、其處に寄つたと云ふ譯で、馬鹿々々しいと云ふことで皆が散じた、それで大同團結も宜いけ

れども、一方に於て、私の率ゐる者は、私から手紙が行つて居るから誰も行かない、今のは偶然其處に行つて居るけれども出席断りと云ふそれで大同團結の爲に寄つたものは何かと云ふと、自由黨ばかり、唯妙なことに私と政治上では同志であり、新聞の上では商賣敵である新潟自安新聞の佐世と云ふ人は、獨り自分の社の記者などを率ゐて出席したのですけれども、何しろ自由黨一杯の所へ持つて来て、そればかりの者が少しばかり入つたものですから、まるで頭から終ひまで亂暴されて、酔拂つた連中は貴様何の爲に來たと云ふやうな罵詈雑言を受けると云ふ譯で、非常に失敗した。さう云ふことが起つたのです。其時は實に危険で、折角の後藤を着くと直ぐに引張つて行つたと云ふことを自由黨の方では非常に恨む。それから大石と云ふものが、輔翼となつて來て居る。之を私が虜にして三日の間、或る酒樓に引張り込んで、二人で酒を飲んで居る。私は其時に感心したのですが、あの人は

其時分から、一寸例の野狐禪だか何だか知らないが、禪味のある人で私が到底説くべからざることをあの人が感ずると、酒を飲んで馬鹿話をするけれども、政治上の話は一つもしない。それで夕方になると宿へ歸るのです。「いやどうも、後藤が焼餅やきで仕様がなないので泊ると云ふことだけは考へねばならぬ」と云ふので、夜は歸るのです。さうして翌朝から又來ると云ふ譯で、是は何の爲に來たのか分らぬので私と一緒に酒飲みに來たやうな恰好になつてしまつた。斯う云ふのも私の方からの苦肉策で、折角來た大石正巳と云ふのに、自由黨の面々は殆ど會はぬでしまつたと云ふことがあるのです。さうなると市島と濱と云ふものは、たゞは置かぬと云ふので、随分危険であつたのです。が、さう云ふことの爲に、幾らか政治の氣配と云ふものが乗つて來て改進黨の者は少しは元氣を出して來た。さう云ふことがあつたのです。

問 岩崎は其頃新潟縣に澤山土地を持つて居つたのですか

市島 非常に持つて居つた。無論大地主の尤なるものであつた。よくあ
あ掻集めたものでした。

問 大同團結はさう云ふことで縮尻つたのですな。

市島 あれば方々で縮尻つた。結局あれは要領を得なかつた。私が非常
に苦心したのは其時です。

それから、もう一つ政治上の大刺激を與へたのは條約改正ですな。
條約改正問題は二度あるのです。一遍は井上馨時代の條約改正、是は
随分非議すべき廉々が多い改正條項であつた。それに對しては自由黨
は勿論ですが、吾々も反對した。そこで自由黨と私共はそれこそ大同
團結で聯合して、あれを非とする建議をやつたのです。それは色々な
條項に付て、一々理窟を言ふのですから、長い建議であつたが、私は
新發田の宿屋で三日ばかり掛つて、やつと書いたものでした。さうな
ると私が一番大事な人間のやうな譯で、自由黨の連中が、私を護りに

來て居る。警察が來ても何が來ても、皆世話を焼いて、私は大層保護
を受けて書いて居ると云ふ譯であつたのです。それはそれで宜かつた
が、それに次ぐに大隈さんの條約改正と云ふことになつて來た。之に
は實に困つた。中には反對のことがない譯でもないけれども、どうも
それは反對する譯に行かぬ。就中外國人を法官とすると云ふやうなこ
となどは、あの時の事情に於て、過渡期に於て已むを得ない。それも
歸化人にするとか、何とか云ふ折衷案もあるにした所で、やらぬより
も宜からう、さうやつて段々歩を進める方が宜からうと云ふ譯ですが、
是などは如何に地方の者が幼稚であつても餘り感心しない、そのみ
ならず、内地雜居と云ふものを非常に恐れたものなので、内地の雜居
を許せば、日本國などは勝手に皆取られるものと思ふので、之を説明
することが、どうも容易でない。自由黨の方は何時も被壞的の論鋒で
すから、大まかに何でも彼でも叩付けると云ふ譯である。大まかに叩

付けるのは容易いが、一々辯護するのは苦しいので、大隈さんの條約改正の辯護には實に苦しんだ。東京からも加藤政之助と云ふやうな連中が來た。島田なども來たかな。あの時の大隈さんの帷幄に居つた者は矢野文雄君で、是は私は全く感心して居る。愈々危機になつた時分に、日に二度三度位形勢を書いた手紙を自分で書いて寄越した。其時分に代筆でもあるか知らんと思つたが、後から調べて見るに、あの人の自筆である。是は私ばかりでなからう。改進黨の鎮臺とも言はれる主な所には、あちこちに當てたものでありませう。随分努めたものである。

其時一生涯忘れなれないと思ふことのあるのは、先刻申しました同好會と云ふものが段々發展して來た。そこで山口權三郎と云ふ縣會議長をした人が、一つ同好會の爲に會場を拵へようと云ふので、其人が會場を造つた。勿論呉れた譯ではなく、寧ろ貸した譯でありますけれども、

全く其目的の爲に會場を造つたのであります。是は相當のものであります。新潟新聞の近くですが、大分立派なものであつて、樓上にはあれでも三百人位の人が會することが出来る規模のものでした。其竣工式と言ふか、開館式だな、開館式を行ふ其日が、大隈さんが足を折つたと云ふ爆彈に罹かつた日である。その電報が來ると、反對黨の新聞社が其電報を刷つた號外を持つて來た、お祝だと言つて三寶に載せて、奉書紙に包んだ嵩高のものを持つて來た。私が會つて見るとそれだから、是は貰はない、拒絕すると言ふと、それを全市に撒き散らかして喊聲を發して歩いたと云ふ譯である。それが私としては實に遺憾なことなんで、やつと盛り上げた同好會と云ふものの開館式と稱する芽出度いことのある日、それに大隈さんの條約改正で非常に苦心した擧句である所へ持つて來て、恰度其日にさう云ふ不祥の事が起つた譯でありますから、私は一生涯の中に恨み骨髄に徹したとでも謂ふべ

きことは其時のことであると平生も思つて居るのです。

大隈さんの條約改正と云ふものが、非常に黨勢には觸つたもので、初期の議會に改進黨と云ふものの頭數が頗る少なかつたと云ふのは、大いに此祟りを受けて居るかと思ふのです。

問 其頃の新潟新聞はどの位讀者があつたものですか。

市島 好い加減なものですな。あの時分一萬あると云ふことは餘程の新開でなければありませぬでしたな。新潟新聞は、あれでも五六千はあつたらうな。新潟は一體新聞が多いのですよ。土地も廣いけれども。

………

問 東北日報は其頃ありましたか。

市島 いやありません。あれは新潟新聞の分れてしてね。

問 新潟日々は

市島 新潟日々と云ふのが私共と打合つたのです。是は貧乏會社で、佐

瀬 一と云ふ人が來て居つたのです。新潟新聞の社長は器用にやられる。やはり官僚に取入つて、色々印刷物を頂戴するなどと云ふことを喜んで、主筆記者なんと云ふものも、やはり幾らか其意を迎へなければ社長は御機嫌が悪い譯です。こつちはぶつきら棒で、さう云ふことは嫌ひですからやらない。一方の新潟日々の佐瀬と云ふ男は、私よりぶつきら棒の人間だが、商賣上已むを得ず、毎日々々縣廳の役人などと暮などを打つて居るのです。そんなことの爲に一年の年期が盡きると、私は東京へ戻つて來ることになつたのです。それは株主に有力者があつて、どうも新潟新聞の記者は立派な人間は東京から來るが、席暖かになると皆戻つて行くのはいけない、是は何か會社に缺陷があるのだらうと云ふことで、段々調べて見た所が、別に缺陷がある譯ではないが、其社長と云ふのがさう云ふ主義の人である、そこで私を支援する或る有力な連中が、株を皆買ふと云ふのです。買ふから譲れと斯

う云ふことになつた。所が誰も譲る者はないので、社長だけが譲つてそれで改革が出来たのです。それで私が居残つて五六年居つた譯で、今度は自分が勝手に出来る譯で、隨て政治運動などの爲に殆ど社をあけて居ると云ふやうなことも構はれなかつたのですが、其株を譲つて出た者が、別に新聞を經營したのです。それは名は別な名でしたが、それが東北日報と云ふものになつたのです。

問 社長は誰ですか。

市島 鈴木長藏、是も相當の人間でしたがね。

問 其頃の新潟縣知事は……

市島 篠崎五郎、籠手田安定などでした。ずつと後には色々な人が迭はりました。

問 政黨を餘り壓迫しなかつたのですな。自由黨はさうでもないでせうが、改進黨は餘り……

市島 ちつともしなかつた。しなかつたと云ふのは微弱であつたからですな。私などは演説は下手であつたにしても、妙なもので、あのやかましい時に、演説で中止を喰つたことは一過もない。佐瀬と云ふ男は何時でも中止を喰ふ。聲でも張上げると直ぐに中止と言ふ。

問 やはり中央の大家であるからと云ふことが響いて居つたでせうな。相手の新聞社長は名の無い人だから……

市島 さうでもないのですね。どうも政争のやかましい時に東京から來る人だと偉さうに考へて、其話は聞くやうな空氣がある。それを待つて居ると經費が溜らぬものですから、吾々縣内に居る者が、其方が偉いのだと云ふことを頻りに宣傳する譯でね。

今考へて見て、其政争の甚しかつた所を想像して見るのですけれど、柏崎方面、中越後ですが、あの土地と云ふものは、よく治まつたもので、演説會とか何とか云ふことで、吾々は屢々行つたのですが

大きな寺で演説をやる、さうすると四五百人位は、鬼も角聽手がある其演説が終ると懇親會を直ぐに其會場でやる。斯う云ふ趣向です。そこで會費五錢と云ふ。五錢位な會費ですから、田夫野人と雖も面白半分に参加するやうな譯です。そこでどうするかと云ふと、まさか五錢の會費で酒を供すると云ふ譯に行かない。そこで牛耳を執つて居る其近邊の案封家が、詰り酒を提供する譯です。今日の選舉法では、ひどく咎める譯ですけれども、其時分にはそんなこともないので、肴代が五錢と云ふやうな譯ですな。竹の皮を切つてそれを皿に代へて、それに澤庵を載せたり、乾物を載せたりと云ふやうなことで、それを酒の肴に代へて、酒は飲み放題、小作人などはぞろりと揃つて地主先生達が酌に出掛けると云ふ譯ですから、面白くて溜らない。さう云ふ風にして糾合したものであるのです。それですから、同好會派と云ふと一村擧げて同好會派になる。同好會派に對し、何と云ふものが自由黨

の方にあるかと云ふと、是は大同連と稱へる、夜なんかはあちこち村を演説などに廻る時には妙なものでした。宿屋でも、車挽きでも兩黨に分れて居る、同好連と云ふ提燈を點けるのは吾々の方、大同連と云ふのは彼等の方と云ふ譯です。或村に行くと全村敵だと云ふことになる。其處へ行くと車挽きが怖がつて、提燈を消すやうなこともあつた。それ程兩黨互に接觸して戦つた譯です。何かの建議をした時に、其村々の印を取つたことがあるのです。其時に私感心したのは、一番から何百番に至ると云ふやうな中間一つも空いてなくてずつと調印するですね。それ程までに行きました。

それから私として忘れないのは、やはり柏崎近くまで行きました時に、椎谷と云ふ昔小さな藩のあつた所がある。其山の奥に庵寺があつて、其庵寺を會場にして演説會を開くと云ふので、私と東京から加勢に來た鹽入太輔と云ふ辯護士——御承知かも知れない。——其二人で

其處へ行つた。鹽人の方は、日のある中にどんどん喋つて歸つてしまつた。私の番になると段々暗くなつたが、備てあかりの設備がないと云ふ譯です。あかりがなくたつて話は分ると云ふ譯で、暗中に喋つて居る譯です。聽衆が僅に二三十人、それから演説が終ると、山坂は危険ですから馬に御乗りなさいと言ふ。それは有難いと云ふので、其馬方と云ふのが段々訊いて見ると、そこらの村會議員です。それが聽衆に混つて居つた。さうして馬を持つて來て乗せて呉れた。其男が言ふのに、私共はあなた方の演説を聽いて大いに感じますのは、吾々も是非やつて見たいものだと言ふことであります。それから憲法の話、兩院制度の話と云ふのを向ふから質問を出す。こつちは好い加減に答へる。段々話をする、それが同好會員、こつちの會員である。俺は實は同好會の發起人の方だが、君がさう云ふ譯なら、一つ同好會の趣意を語らうと云ふので、馬上で私が同好會の趣意を語りながら、椎谷

に違したことがあります。初めは貴様であつたのが、君となり、終ひにはあなたとなつた。椎谷の宿屋で馬から下りて、向ふは菅笠を取り、私は帽子を取つて丁寧にお辭儀をして別れたことがある。其近邊では馬を持つた農家は大分富んで居るのださうです。隨て村會議員でもあり、政治思想は段々さう云ふ所まで及んだのですね。

問 新潟新聞に何年まで居られましたか。

市島 二十三年まで居ました。選挙に敗れて、それから東京に戻つたのです。

問 それから讀賣新聞ですか。

市島 さうです。何しろ私は中越、下越の全部を提げて其衝に當つて居つた譯であるので、一番私に味方の多い所は中蒲原であつたのです。龜田と云ふ所が新潟の隣りにある。其龜田に協會を起して、私を始終接ける有力者は皆龜田の協會中の人間であつた。中蒲原と云ふ所は、

ずつと何處でも私に關係が附いて風靡の勢ひをなして居つた。そこで議會の選舉と云ふ時になつて、若し自分は、何處でも勝手の所に候補者として立つことが出来れば、無論中蒲原に立てば、何でもなく當選することが出来た。所が全部を統率して居る私としては、さう云ふ勝手なことは出来ないで、一番難かしい所に行かねばならぬ。而も自分の郷里と云ふものを別にして、外へ行くことは宜くないやうな感じを自分も持つたものです。そこで第二區の新發田、岩船方面から立候補した。岩船も北蒲原も自由黨の相當にある所です。兎角郷里と云ふものは入り悪いものでして、あの淺垂しがと云ふ譯のものでありますから、是は餘り開墾が届かないで居つたのですが、其處へ行かねばならないと云ふことになつた。敢て勝てようとも思はなかつたが、果して負けた。私の選舉區は其時分三郡でした。一つは東蒲原である。是は極めて小部分でした。二郡若くは三郡に亘る所の選舉區に於ては、

どうしても兩郡から一人宛、二人候補を立てないと大體は勝算がない所が私の場合には全く岩船と云ふ一郡に味方がなかつたのです。それで戦つて見て、初期の議會は負けたのです。

其時分の選舉の實際を見ますと、何しろ金持は皆私の方の側、一村の長とでも云ふやうな者、大家とでも云ふやうな者は皆私の方の關係者です。それから打算すると決して負ける道理はないのですが、そこが一票は一票で、投票一票に決して甲乙はない譯ですから、自由黨の連中はそこに至ると中々働きがある。草鞋穿きで非常に輕快に運動をする。所が一村を治めて居るやうな豪家のある村と云ふものは、其家で以て治まつて居るのであるけれども、是は番頭などを使つたりなんかして、其番頭も好い加減にやると云ふやうなことです。迎も自由黨の輕快なる働きには及びはしないのであつて、到頭負けたと云ふ譯です。是は別に遺憾はないのであつて、寧ろ負けるべきものと自分

は思つて居つた。其時分の選挙は安上りのもので、幾らも要らなかつたです。一體新潟縣と云ふ所は選挙には餘り金を使はなかつた所と言ひ得るです。二三千圓位で以て、何も彼も賄ふことが出来たと云ふのが其當時の状況です。其時分は黨派の方から金を出して呉れるなど云ふことはなし、やはり有志が金を出すと云ふことが本體で、力有る候補者は親戚から金でも貰つて来て出すと云ふ程度のものであつた。どちらかと言へば、洵に純粹なやり口で、後のやうな汚いこと云ふものは殆どないと云ふやうな有様でありました。

段々選挙をやつて見て感ずることは、どうしても人任せでは駄目なものであると云ふことです。それから私は自ら参謀をして、候補者兼参謀で、其時も勝つたのです。其勝つた一つの原因は、岩船郡と云ふ郡内に一人も私の味方がない、然るにその郡内で一番の金持が私と協同することになつた。是は自由黨に向つては非常な打撃なので、そ

れと一緒になつて、會つて一週も負けたことがないと云ふ、斯う云ふことになつて来た、いやそれまでになるには、それはどうも難儀を経たものでして、演説會を開くと云つても會場を邪魔して、寺であらうが芝居小屋であらうが、悉く自由黨の連中の邪魔でやることが出来ぬ味方は殆どないやうな譯で、演題を書くこと云つても自ら書く、それを貼るにも自ら貼る。實に憐れつばい話でして、自分が當選した時に、岩船郡に行つて長々と苦勞したことを一席辯じたことがあつた。其時分には自分ながら涙が出た。

大隈さんが内閣を組織した時のことなどは餘り詳しく言ふ必要もないかと思ひますが、私一身上としては餘程不思議な譯なんで、私は政界に思を斷つて、早稲田大學で圖書館へ入り込んで、十數年圖書館長をやつて居つた。そこへ大隈さんが總理大臣になつて、議會を解散したと云ふ譯です。其時の黨派は加藤高明君が率ゐて居る譯です。其黨

派で以て働けば宜い譯なんですが、私共は大隈さんの關係に於て、是は別働隊として大隈伯の後援を爲さなければ義理が済まぬと云ふやうな譯で、早稻田連が大隈伯後援會と云ふものをそこで拵へたのです。それから人もあらうに、私にやれと云ふ、大隈伯もさう言はれると云ふ、私は圖書館長である。十幾年まるで政治に携つたことのないそんなやうな者が掛けるのもおかしい譯と思つたのですけれども、誰もやらぬと云ふなら仕方がない、やるなら、好い加減なことでは困るので、私自ら會長になると云ふので、敢て自ら進んで後援會の會長になつて現れたのですが、極めて滑稽な話である。人が何と思つたか知らないが……それで上野の精養軒を會場にして東京の有ゆる方面の有力者を集め會して、大隈侯を始めとして内閣大臣が一々それに向つて演説をする。私が其チエアマンである。先達てまで早稻田の圖書館長であつた人間が、チエアマンとして其處に坐ると云ふ譯です。勿論

學校へはちやんと辭表を出して居る譯です。私ばかりではない、早稻田の教授連なんか續々演説の衝に當つて、あちこち派遣して大分騒いだのです。是は實にえらかつた。大隈さんの力と云ふものも實に偉いと云ふことを感じたが、自分は後援會會長ですから大隈さんの出掛ける時に、何時も自分が附いて歩くのです。大隈さんはそこで始めて西洋風のことをやつて見た譯ですね。所謂汽車演説と云ふものは、恐らく大隈さんが日本で始めてであらうと思ひますが、一分でも二分でも、停車の時には顔を出して、其處には多くの人間が殊更集つて居るので、それに向つて一口か二口、一分か二分でも時間があると何か言はれる、それを待受けて居る。それで其處が納つて居る。到る處さう云ふことをやつてのけて、随分大隈さんも聲を出して、歸る時でしたが、名古屋を通つた、彼處は何時でも夜中になる、其時は聲が盡きて、對話して居つても、何を言はれるか分らない位に聲が嘎れて居つた。

所が名古屋は非常に盛んな所で、夜の十二時近くに着いたので、今の衆議院議長小山君の選挙区で、小山君其他大勢の人が迎へに出て居る、彼處に今はありませんが、國技館と云ふものが出来て居つて、其國技館まで通入れない連中が兩側に堵を築いて居る、そこをやつと切抜けて大隈さんが行かれる、さうして國技館の演壇に起られた。其時に驚いたのは、嘖れ聲で何と言つて居られるか分らないのが、演壇に起つと中々聲が徹するので、一時間ばかりやられて大喝采を博したと云ふやうな譯です。さう云ふ譯で到る處大隈さんが其土地を踏んだ限り、必ず大隈方になると云ふ都合でしたが、加賀へは大隈さんは行く心持がないので、加賀は省いて居つた。所が是は大隈さんが來なければどうであらうかと云ふので、横山章と中橋徳五郎の對抗ですが、態々色々な有力者が、大隈さんに請願に來た。それでどうだい行くかいと私に言はれるので、あなたが行く積りなら行きますと云ふので、

急にプログラムを作つて來ました。そこで旅館は直ぐ近間にあるのに大隈さんを見世物にして全市を俵に乗せて歩いた。到る處歡呼して迎へたものだから、大隈さんも帽子を取つて禿頭を振りながら全市を廻つた。是は私後援會長として一番の難戦地だと云ふので、一週間特別に行つて居つたことがある。其時分には互角で、勝負どつちかと思つて居つたのですが、大隈さんが行つてから、形勢が好轉して大多數で横山が當選した。選挙史上で私が携つたのでは、此石川縣の戦程大規模なものはないと思ふ。横山章と云ふ人は後に没落してしまつたのですけれども、其時分には中々勢ひの良いもので、何でもあの人の關係して居る會社團體が三十六七もある。そこで其土地に居る門閥家で財産家でもあると云ふ横山、それに對して中橋は、官途には相當の位置を占めて居る者であるけれども、平生は其土地に居ない者であるものですから、居ないの方が旗色が悪い。それで關係を附けようと云ふ

ので、有ゆる方面から要りもしない物を買つた。米屋からは米を買ひ、瀬戸物屋からは瀬戸物を買ひ、漬物屋からは漬物を買ふ。必要もないものですから、蔵を建ててそこに買つた物を入れて置くと云ふ有様で毎日々々が喧嘩である。私もそれに参加して毎日々々色々なことをしたのですけれども、新聞を兩方が持つて居つて、一つは新聞で戦ふのです。私が其處に行つた時に恰度若槻君が一緒に、若槻君が財政演説をやる。所が選挙場裡に財政演説などをやつたつて、ちつとも效能がないのです。そこで後援會會長も何かやれと云ふので其時やつたのは實に辛かつた。と云ふのは、横山は私の方には私的關係は一つもない人である。中橋と云ふ人は、私には頗る關係が深い、大阪に居られた時など、早稻田大學の爲に大變力を借りた人で、頗る關係が深い、それを敵に廻さなければならぬので困つたのでありますが、狡いことを考へて、中橋は批評しないやうにして、原敬か大隈かと云ふ演題で、

横山なんか偉さうな顔付をして居つたつてそれは何でもない、横山は大隈さん麾下の者であり、中橋がどう言はうたつて、是は原敬麾下の者である、であるから末葉枝葉のことを論じても詰らないから、大隈か原かと云ふことで、其二人の親方の方を比較する方が近道だと云ふ話に逃げたのでした。中々猛烈なものであつて、昔はあれで中々やましい團體があつたが、時勢が變つて其やかましい團體の方が、横山に附いて居るので餘り殺伐な話はなかつたのですが、私も參謀に加はつて居つて、愈々敗けたらどうしますか、斯う云ふ質問を同志の中から受けた。それで私は、それは何でもないさ、其時は投票函を破るのだ、一人や二人人間を殺したつて構はないぢやないかと言つたら、はあと言つて驚いて居つた。それは殺伐な歴史を有つて居る所ですから私もついそんなやうなことを言つたのだが、それで今度は永井がやると云ふ時になつて、大隈さんの所に同志が來て、あの先生に來て貰ひ

たいと云ふことであつたが、私は御免蒙つた、そんなものです。

問 話は少し前へ戻りますけれども、新潟時代に憲法發布があつたのでございましたか。

市島 新潟に居ましたね。

問 当日の御感想はどうであつたらうか。

市島 どうと云ふ程のこともないのですね。なぜと云ふに其日を待つことが長かつたからね、突發事件が起れば多少の感想もある譯だが、それはもう其日を待ちに待つたものですよ。

問 批判する邊はなかつたのでしようか。

市島 邊どころではない、當然のことだと思つて居りましたよ。何しろ憲法全部、あれを悉く電信で以て取るので、それを翻譯したりなんかすることは、新聞記者としては非常に忙しかつた。あの時に新潟の縣會議長が鈴木昌司、自由黨の人です、「只今馬車にて参内」とか何と

かいふ電報が來た。馬車にてがおかしくて今でも憶えて居る。

問 今少し進歩的な憲法が發布されさうなものだとか云ふ憲法發布に對する不満などはなかつたですか。

市島 それは私は全體にはなかつたと思ふ。私はどつちかと云ふと伊藤さんはよく彼處までやつたと思ふね。中々あんなことで收まるまいと寧ろ感ずるやうなあの時分の形勢であつたのですかね。欽定とは言ひながら、よくも收まつたものですね。是は國家の仕合せと言ふべきである。別にあれに付て難癖を言ふ者は新潟縣にはなかつたな。一般にもあれで落付いたやうなものぢやないか知らん、内々色々不満を言つた者があるかも知れない、大隈さんの建議の國會開設の期日と云ふのは十六年ですか。

問 十六年です。あれが伊藤家にあるのを複製したのを今日持つて來るのを忘れました。

市島 私も持つて居りますがね。

問 赤井事件の時に入獄されたのは、何か新聞で御審きになつたのですか。

市島 赤井事件のことは私にはよく分らぬですがね。此間も調べて見たのに、赤井が脱獄して俥に乗つて逃げる時に、一緒に脱獄した男が鐵の棒、詰り窓の鐵欄であつたのだらう、それを持つて居つたので發覺すると困ると云ふので車夫を殺したとある。それであちこち身を隠して居つた。一體あれは何の爲に囚はれたのかと云ふことは、私も一寸分らないのです。赤井と云ふ者がそれこそ詰らぬ壯士だからね。

問 御承知ですか。

市島 えゝ知つて居ります。年は若いし、詰り活氣に満ちた命知らずと云ふあの時分の或る青年を代表して居るやうな人間である。

問 あれを大した事件に仕上げたのは、地方の警察など……

市島 堀 太郎、地方の檢事補と云つたか何か、是が悪いので、自分は何でも管理して居る金を使つたと云ふ、それで少し事を大きくしないと金の辻褃が合はないと云ふのであゝ云ふことを起した。何でも動機は、富山縣の何とかの會に集會があつた時にそれを調べた、所が某と云ふ者が、妙な連判狀みたやうなものを持つて居る、それが始まりのやうだね。中々覺束ないことで、私共のあの時分に見る所に依ると、絶対に國事犯などと云ふ大袈裟なことを以て目すべきものでないと思ひますね。却て馬鹿々々しくて本當の實刑に處せられたものは、吾々新聞記者なんで、何しろ八箇月、十箇月の重禁錮、赤井は人を殺したと云ふので、是は特別だけれども、無暗に自由黨事件に結付けて同情を寄せた者の方がすつかりやられて、私共新聞記者でやられた者が幾人あるか、七八人は新聞の署名人がやられた、社長であらうが何であらうが、皆情を知る者は共犯を以て論ずると云ふ、是が辛いので、東

京ではそれで以て社長は皆やめてしまつた。是は始まりだから少しは名でも出して置かねば景氣が悪いと思つて、うつかり出して居るとそれでひどくやつつけられた。是などは餘り下らない話でね。其罪となるべき事が如何にも詰らぬ、内閣大臣を攻撃したとでも言ふならまだしも、そんなのではないので、小さい警察署長が對手なんだから……

問 鈴木昌司だの堀川信一郎と云ふのがあの時分やられたやうでしたね
市島 やられたけれどもあれは捕まれただけで、多くは皆許されたのです。八木原と云ふのが何であつたか知らんが、私共が行つた時に牢屋に入つて居りました。

問 先生などは、どう云ふ罪名ですか。

市島 色々ですよ。新聞條例違反と云ふのもあり、官吏侮辱と云ふものもある。新聞條例違反と云ふのが難かしいので、豫審下調に關すること
は載せてはならぬと云ふ程度の問題ですからね。裁判の邪魔になる程

詳しく載せればいかぬと云ふことは常職で分つて居るけれども、少し觸れても、それはいけないと言へぬことはないので、さう云ふことまで罪になる。あの時分に建白などと云ふものは載せてはいけないかつた是等は理窟があることはあるのです。それで新聞記者と云ふものは、實に毎日々々冷々してやつて居つたものです。私の考へますことはそんなことで詰りませぬ。何か御質問があれば應ずることが出来るかも知れんが……

問 さう云ふ入監中の待遇などは普通の囚徒と同じですか。

市島 それは私のは別格で、私のやうな例は、恐らく陸奥宗光などと云ふ人でもなからうと思ふ。それは新潟は復讐的に酷い目に遭はせたけれども、色々な者を拘束して居るので監獄が一杯で信州に行つた。信州に行つた所が非常に仕合せであつた。其時分の縣知事は新潟縣の私共の郡内の學者の家筋で、大野誕と云ふ人、其關係で越後の人が屬僚

として澤山行つた中に、私の親類の叔父格になつて居る人と云ふのが元講武所の役人であつた、それが附いて行つて居つた。さう云ふ關係でどつちかと云ふと優待した。典獄が同地方の者だと云ふ譯で下らぬ著述などもやることが出来た。監獄の體裁からすると長野の監獄と云ふものは非常によく整つて居つた。監獄で一番困ることは木材の濡けて居ると云ふことである、是は人間の身體には非常に困る、新潟の監獄の困つたことは、乾かない松板を以て床を拵へてじわじわして居るさう云ふ所を逃出することが出来たと云ふのは、全くの仕合せでした。それから長野の監獄に行つてからも長い間、十箇月になつてからも未決囚の部屋に置かれた、未決囚と懲役人とは一緒にすることは出来ない筈なのを一緒に置くと云ふ譯、殊に甚しきに至つては鹿島君などは箱まで入れて呉れると云ふ話、さう云ふことは禁ぜられて居る譯であります。餘り長くさう云ふ所に入れられて運動が付かぬから、こつち

から催促して勞役の方に廻して貰つた譯です。恐らく陸奥と云ふ人もそれ程の待遇は受けなかつたらうと思ふ。随分規則破りの待遇をして呉れた譯である。けれども劍呑なものですな。あれは殺された所で仕方がないね。病氣と言へばそれつきりの話になつてしまふ。

一同 有難うございました。



